

アメリカ女性作家とシカゴ万国博覧会

大井 浩 二

一八九三年にシカゴで開催された万国博覧会には、かなりの数のアメリカ文学者が見学を訪れて、その印象をさまざまの形で書き残している。ヘンリー・アダムズ、ウィリアム・ディーン・ハウエルズ、セオドア・ドライサーなどがすぐに思い浮かぶ名前であるが、ここでは特に、マリエッタ・ホリー（一八三六—一九二六）、クララ・ルイーゼ・バーナム（一八五四—一九二七）、フランシス・ホジソン・バーネット（一八四九—一九二四）という三人の女性作家の作品を取り上げ、そこに浮かび上がってくる博覧会のイメージを探ってみたい。現代の読者が記憶しているのは、『小公子』や『秘密の花園』の著者であるバーネットの名前だけであって、あとの二人はすっかり忘れ去られた存在であるけれども、この三人はそれぞれ数多くの小説作品を発表して、当時広く読まれた大衆作家であったから、彼女らの作品を検討することによって、「ホワイト・シテイ」の別名で知られるシカゴ万国博覧会に対してアメリカ大衆一般が示した反応を明らかにすることができるにちがいない。

マリエッタ・ホリーは博覧会開催の年に『万国博覧会でのサマンサ』（一八九三）を出版しているが、これは一八七三年から一九一四年にかけて、「ジョサイア・アレンの妻」というペンネームで発表された二十冊を越える作品のなかの一冊である。そこに登場するサマンサ・スミス・アレンという女性は、ジョーンズビルという村で夫のジョ

サイアと暮らしている、きわめて常識的な、村の女哲学者といったタイプの、体重二〇四ポンドの女性であって、方言丸出しの、ユーモアたっぷりの語り口で、婦人参政権、禁酒運動、人種、戦争、帝国主義、労使の対立などといった問題に積極的に発言している。当時、サマンサのユーモアはマーク・トウエインに劣らぬ数の読者を喜ばせた、という意見も聞かれ、『オックスフォード版アメリカ文学案内』には、「ジョサイア・アレンの妻」は「その多作ぶりのゆえに、長年にわたって日常語となっていた」と説明されている⁽⁴⁾。

『万国博覧会でのサマンサ』は、サマンサとジョサイアがジョーンズヴィルからはるばるシカゴまで出かけ、博覧会場のパヴィリオンをつぎからつぎへと訪ねては、その印象を掛合い漫才ふうのやり取りのうちに物語る、という形式を取った六百九十頁を越える長編で、博覧会開催の噂が村に伝わってから、夫婦が出発するまでに三分の一近くの二百二十頁ばかりを費やすといった具合に、ゆっくりとしたテンポで展開している。マリエッタ・ホリーは、シカゴの博覧会の他にも、アメリカ建国百年を記念する一八七六年のフィラデルフィア博覧会や、ルイジアナ購入を祝賀する一九〇四年のセントルイス博覧会に取材した作品を書いているが、旅行嫌いで出無精の彼女は、どの博覧会場にも実際に足を運ぶことはなく、執筆にあたっては、地図やガイドブックを参照するだけであった、と伝えられている⁽⁵⁾。それだけに、この作品に示されているのは、当時の一般大衆が共通して抱いていた博覧会の印象であった、という見方ができるかもしれない。

ともあれ、サマンサが「あの驚くべき魔法の都市」と呼ぶコロンプス万国博覧会の会場に入った彼女を出迎えたのは、管理センターの壮大な建物であったが、「この建物の素晴らしい規模と周辺の魅力」を描写することは不可能である、と彼女は語り、「見事な光り輝くドームのある、この高くて、壮麗な建物を、あの比類ない宮殿の都市のなかで最も立派な建物と呼ぶ人もいる」と述べている。「パラダイスへの通り口を別にして、これまでにこれほど豪華な通り口があった例はない」という一文は、彼女が「ホワイト・シティ」を「パラダイス」と同一視していたことを物

語っている。また、「巨大で、美しくて、夢のような、雪のように白い宮殿」に囲まれた「榮譽の中庭」の光景に圧倒された彼女の、「このような眺めは、新しいエルサレムの町並みがわたしの目の前に開けるまで、二度と再びわたしの目の前で輝き、広がることはあるまい」という眩きも、「魔法の輝きのホワイト・シティ」のなかに「天国」の前触れを感じ取っていたことを示しているのである。

「湖の青い水面」や「ペリスタイルの高い象牙の列柱」や「共和国の立派な立像」などの景観を目の当たりにしたサマンサは、「何もかもが完璧だった——この場面の完璧なハーモニーには疵一つなかった。その比類ない美には限りがなかった。そう、わたしのうっとりとした目に飛び込んできた場面の栄光は、生涯、わたしと共にあって、より完璧な何かよって打ち負かされたり、取って代わられたりすることはあるまい、死すべき人間が永遠性を身につけ、人間の目が見たことのない栄光がわたしの栄光にあふれた目に飛び込んでくるあの瞬間までは」という感想を洩らしているが、ここでもまた、彼女が「ホワイト・シティ」を「天国」あるいは「新しいエルサレム」のイメージで捉えていることは明らかである。この後のサマンサは、博覧会場の到る所で、「美のエデン」とか「目眩く美と魅惑の都市」とか「神々の庭園」とかいった表現を用いているが、『万国博覧会でのサマンサ』の主人公にとって、「ホワイト・シティ」は何よりもまず、「エデン」や「新しいエルサレム」を連想させるような、日常性を完全に拒絶した、聖なる空間でなければならなかったのである。

この博覧会でサマンサがまず最初に時間をかけて見学したのが、女性館であったというのは、女性問題に強い関心を抱く彼女としてはきわめて当然のことであつた。そこを訪ねることに難色を示す夫のジョサイアに向かって、サマンサは「女性の偉大で高邁な仕事」における「女性自身の讚美」と「西暦一八九三年に女性が自らを置いた高い玉座」を見たいという「女性の願望」は男性には理解できない、と語っている。この女性によって設計された「美の宮殿」で、彼女は絵画や彫刻や書籍といった「わたしと同じ性の人間が作り出した不思議や驚異」を眺め、「女性が万

国博覧会に参加できるということを男性が思いいたるまでに、四百年の月日が経なければならなかった」という感慨に耽っている。こうして、女性館で一日を過ごし、「そこから一步も出なかったし、出たいとも思わなかった」サマンサは、それを「この美しく、神聖な場所」と呼んでいるが、この表現はそのまま「ホワイ・ティ」全体に当てはめることができるではないか。サマンサにとって、イタリヤ・ルネッサンス様式の女性館は、シカゴの万国博覧会の縮図としての「神聖な場所」に他ならなかった、と言ってよいだろう。

シカゴの博覧会はコロンブスによるアメリカ大陸「発見」を記念するための行事であったから、『万国博覧会でのサマンサ』の随所にコロンブスを讃美する文章が見出されるとしても不思議はない。事実、サマンサは、作品の冒頭で、コロンブスが昔から彼女にとって「この上ない興味と賞讃の対象」であったことを認めているし、コロンブスは「わたしの主題」である、とも断言しているサマンサにとって、博覧会そのものが「大いなる新世界」であった、と言えるかもしれない。「コロンブスが発見した島の一つ」であるハイチの建物を訪ねて、そこに陳列されている果物や穀物や機械類を見学した彼女は、もしこの光景をコロンブスが見たとしたら、彼は「ジョサイア・アレンの女房よ、ハイチは実に見事にやっている。わしがそれを発見したことを嬉しく思うよ」と言うだろう、と述べている。サマンサにとって、コロンブスは人類のために偉大な貢献をした、偉大な発見者以外の何者でもなかった。そうした彼女の姿勢は、二年後の一八九五年に、ハイチと同じ西インド諸島にあるセントトーマス島で、「黒人や混血児や破産した農園主は、われわれが先日、シカゴで祝賀したコロンブスと四百年に及ぶ文明の勝利の結果である」⁶⁾と書き留めているヘンリー・アダムズの暗い発見と鮮やかなコントラストをなしていることを指摘しておきたい。

『万国博覧会でのサマンサ』は、コロンブスのような「世界をより良く、より賢明にすること」を夢見る人々が「完全な知識と理解と素晴らしい共感という、あの広々とした海原に船出する」姿を、サマンサが思い描く所で終わっている。「無限の愛という陽光に照らされて、この人々はただひたすら漕ぎ進む」という最後の一文は、F・スコット

・フィッツジェラルドの『偉大なるギャツビー』の幕切れを思い出させるが、「ジョサイア・アレンの妻」の作品を愛読した当時の大衆にとって、コロンブスによるアメリカ「発見」を記念する万国博覧会の「ホワイト・シティ」は、すでに西なるフロンティアを失って、産業的な「灰の谷」に変貌しつつある世紀末アメリカで、「新世界のういういしい緑の胸」を象徴する世界であつたのかもしれない⁽⁹⁾。一見いかにもユーモラスで、取るに足らない大衆小説のなかに、美徳の共和国の崩壊に直面していたアメリカ人の危機的狀況を読み取ることができるのではないだろうか。

「ホワイト・シティのロマンス」という副題のついた小説『スイート・クローヴァ』（一八九四）⁽¹⁰⁾を書いたクララ・バーナムは、もともとマサチューセツ州の出身で、九歳のときにシカゴに移り住み、二十歳になる前に弁護士ウォルター・バーナムと結婚した後、三十冊近い大衆小説を有力な出版社ホートン・ミフリンから出版している。博覧会の建築を設計監督したダニエル・H・バーナムの親類ではなかったらしいが、生涯の大半をシカゴで過ごし、ミシガン湖を見下ろすホテルの一室で朝の九時から正午までを執筆に当てていた⁽¹¹⁾、と伝えられる彼女は、湖畔のジャクソン公園で開催された博覧会を舞台に展開する小説を書くのに最も相応しい地元の作家であつた、と言えるかもしれない。

この小説は、シカゴ生まれの裕福な青年で、ハーヴァード大学を卒業したばかりのジャック・ヴァン・タッセルと、やはりシカゴ生まれのミルドレッド・ブライアント、それにジャックの従兄で、ボストンに住んでいる弁護士ゴアラム・ページと、ミルドレッドの姉のクローヴァー、という二組の男女の恋愛を描いている。ジャックはブライアント姉妹とは幼馴染みで、クローヴァーに好意を抱いていたが、貧しい姉妹一家の面倒を見るために、ジャックの父親が姉妹と結婚してしまい、その直後に過労がたたって急死するという事情があつて、彼は姉妹に対して反感を覚える、などといった筋立てになっているあたりは、いかにも大衆小説的と言えるだろう。勿論、このジャックをめぐる複雑

な人間関係に解決の糸口をあたえ、ゴアラとクロウヴァーの仲を取り持つのは、シカゴの万国博覧会に他ならず、物語は博覧会が計画された当初から、終了後に建物が焼け落ちるまでの過程を巧みに織り込みながら進行している。副題の「ホワイト・シティのロマンス」というのは、博覧会を舞台に展開するロマンスを意味しているだけでなく、博覧会そのものの誕生から消滅までのロマンスを意味している、とも受け取ってよいだろう。

その上、博覧会が開催されるまでは、ボストンとシカゴが小説の主要な舞台となっていて、会場のジャクソン公園やミッドウェイ・プレザンスが博覧会以前はどういう様子であったのか、開催地としてのシカゴを東部の人間がどのように見ていたのか、実業家であったジャックの父親が博覧会の成功のためにどのような努力をしたのか、などといった話題が東部と中西部の視点から導入されている。たとえば、開催地をめぐって、東部人のゴアラムが「そんな問題をシカゴに任せるのは危険だというのが一般的な感情だと思うよ」と言えば、シカゴ子のジャックが「シカゴがそのための唯一の場所、すでに運命づけられた場所だということは、誰にだって、目を半分閉じていても判るさ」と反論するといった調子である。その意味では、『スイト・クロウヴァー』を、著者自身の伝記的背景と密接に結びつけた一種の「二都物語」と看做すこともできるだろう。だが、いよいよ博覧会が始まる頃になると、四人の主要人物だけでなく、友人や親類の者たちも見物のためにシカゴに集まり始め、期間中は毎日のように会場に通う姿が紹介されることになり、そうした人々が受けた強烈な印象を通して、ボストンでもなければシカゴでもない、いわば第三の新しい都市としての「ホワイト・シティ」の意味が明らかにされるのである。

開会式の当日は悪天候であったにもかかわらず、「ホワイト・シティは、足元を汚す泥から完璧なまでに見事な百合の花のように聳え立っていた」とバーナムは書いている。ここでの「百合の花」のイメージはいささか陳腐であるとはいえ、「泥」とのコントラストによって、「建築物の白い壮麗さ」と「荘厳な静けさ」を強調していることは疑えない。「榮譽の中庭」へやって来たジャックとクロウヴァーとミルドレッドの三人は、クリーヴランド大統領が電気

のスイッチを押した「厳肅な瞬間」に、「壮大で、輪郭の美しいホワイト・シティの巨大な鼓動が脈打ち始めた」のを感じる。クロウヴァーとミルドレッドは無意識のうちに手を取り合つて、「壮麗なペリスティル」の前に立ち止まり、ジャックは黄金色の共和国像からヴェールが滑り落ちるのを見て、博覧会の開幕が同時にまた「新しい時代の幕開き」であることを発見した、と説明されている。

「ホワイト・シティ」の中心に位置する「比類ない榮譽の中庭」は、「あのすべての博覧会への巡礼者のメッカ」と呼ばれ、「人造湖の四つの側面に向かい合つた雪のように白い宮殿」、「絵画や彫刻でふんだんに飾られた王宮」、建物の到る所で点滅する「小さな白熱灯」といった「つぎつぎに現われて美しさのクレッシェンドを形造る場面の變化」をバーナムは詳しく説明している。ゴンドラに乗つて見物しているジャックにとって、「ホワイト・シティ」は「神秘的な都市」か「妖精のようなスペクトル」であつて、他の見物人たちが「夢のなかの人物」のように見えたとすれば、彼自身が「夢の国にいたいだ」と叫び、「眠りから醒める夢遊病者」のように感じたとしても不思議はない。だが、「この人間の手で建てられた、堂々として美しい場所の何か」によつて、「尊敬と、一種の畏怖の念」を掻き立てられたジャックが、「榮譽の中庭」のなかに「天都のさまざまな可能性の実現」を感じ取つたという説明は、『万国博覧会でのサマンサ』の場合と同じように、「ホワイト・シティ」が「新しいエルサレム」を連想させる、聖なる空間であつたことを如実に示しているのである。

『スイト・クロウヴァー』の冒頭で、一八八九年の夏のある朝、ジャックの父親がミッドウエイ・プレゼンスと呼ばれるシカゴの「公園組織のなかで最も人通りの少ない、最も田園的な大通り」で馬車を走らせている場面が描かれているが、この「途切れることのない静けさ」に包まれた大通りが、四年後には「世界の文明国や半文明国や野蛮国の出会う集合点」になることを誰も知らなかった、と説明されている。博覧会が開かれると、そこには「フェリス・ホイール」と呼ばれる大観覧車が設置され、開放感にあふれたカーニヴァルの雰囲気には沸き返ることになるが、

この小説の作者に言わせると、「ミッドウェイ・プレザンス」という名前は、「さまざまな言葉のバベル、雑音と悪臭の戸惑うような連続、感動と感激の目眩くような群れ、新奇な光景の驚くべき集合」を意味していた。このきわめて世俗的な場所が、聖なる空間としての「ホワイト・シティ」に対立していることは、あらためて書き立てるまでもあるまい。

この小説には、博覧会を見物するために東部のペアフィールドの村からシカゴへはるばるやって来るミス・ベリーという老嬢が登場しているが、彼女の証言によると、「あのミッドウェイは物質を表わしているにすぎないのに、この素晴らしいホワイト・シティは精神の象徴ですわ」ということになる。さらに彼女は「あの一マイルもある言葉のバベルから出てきて、ブリッジを一つぐり抜けると、もういきなり、素晴らしい、美しい沈黙のなかにいる」と語り、「死ぬということは、ミッドウェイとホワイト・シティを隔てている境界線を横切るようなものかもしれない」とさえ言い切っている。「博覧会を作った人たちは神様を信じていて、神様と神様から得た教えを、その作ったもののなかへ入れた」のであり、「わたしたちはそれを電気ショックのように感じるのです」という老嬢の言葉もまた、彼女が「ホワイト・シティ」を、この地上で天国に最も近い場所と受け止めていたことを物語っている。いや、それがミス・ベリーだけの感慨でなかったことは、見物から帰ってきた別の登場人物が「死ぬまでは決して天国へは行けないと思っていたのに、わたしはそこへ行ってきたわ」と語っていることから推察できるだろう。

「ホワイト・シティ」はまた、恋人たちにとっても、非日常的な空間としての意味合いをもっている。ある夜、「パリススタイル」に昇ったクロウヴァーとゴアラムが管理センターの建物を眺めると、「周りの深い闇が、このただ一つの明かりの点った建物に超自然的な効果をあたえていた」ばかりでなく、「それは、地上と何の繋がりもない空中の城郭であり、古の予言者に訪れたような意気を高揚させるヴィジョンであった」と書かれている。そうした「超自然的」で「超自然的」な雰囲気の中で、ゴアラムは「いま、天国そのものがここに存在している」と叫ぶのである。他

方、ジャックとミルドレッドとの関係が順調に進まないのは、この「ペリススタイル」によって象徴される「ホワイ・シティ」の「超自然的な効果」にミルドレッドが魅せられてしまったためであった。「ペリススタイルと、そこから見る事ができるものをくださるなら、博覧会の他のものは全部、捨ててもいいわ」とさえ断言する彼女は、ジャックの愛を受け入れることに抵抗を覚えていたが、小説の最後で、博覧会場跡が炎に包まれて、ジャックが「ぼくのライバル」と呼ぶ「ペリススタイル」が焼け落ちたとき、ミルドレッドはやっと彼との結婚を決意する。「ペリススタイル」が「天国へ戻って行った」という彼女の言葉は、「ホワイ・シティ」が聖なる空間であったという事実を再確認しているに過ぎないのである^②。

『二人の子供の天路歷程』（一八九五）^③は、『小公子』（一八八六）の著者として有名なフランシス・ホジソン・バーネットによって書かれた少女少女向きの作品である。バーネットの伝記作者であるアン・スウェイトは、彼女自身がシカゴの博覧会見物に出掛けたことは明らかであって、「さもなければ、二人の子供の天路歷程』は書かれなかったにがいない」と述べたあと、この作品は「彼女の標準的な長さの子供向きの本のなかでは最も弱く、本当の面白味のないお伽話、堅い芯のないチョコレートのはいった箱であった」と酷評している。だが、その文学的価値は別として、「シカゴ博覧会を余すところなく扱った作品」という別の論者の意見からも察することができるように、「ホワイ・シティ」のイメージを考えようとする場合には、やはり取り上げないわけにはいかないだろう^④。

ここに主人公として登場するメグとロビンという十二歳になる双子児の姉弟は、四年ばかり前に両親を失い、イリノイ州で農場を経営している叔母のマティルダに引き取られている。姉弟は二人だけで肩を寄せ合って生きて行かねばならない上に、農業にだけ興味のある現実的な叔母がちっとも構ってくれないので、二人は納屋の二階の片隅に自分たちだけの世界を見つけ、そこでメグの愛読する書物がジョン・バニヤンの『天路歷程』であったという物語の展

開が、この作品の題名と深く関わっていることは言うまでもない。メグはバニヤンの主人公クリスチャンがたどり着く「天都」を「シティ・ビューティフル」と名付け、それが地上のどこかに実在することを願いつづけている。姉弟にとって、マティルダを中心とする世俗的な世界は、バニヤンのいわゆる「破滅の町」以外の何物でもなかったのである。

ある日、二人はシカゴで万国博覧会が開かれようとしているという噂を耳にする。博覧会に関する新聞の切抜きや雑誌の写真に夢中になっている二人にとって、それは「人間の頭脳によって計画され、ただの人間の手によって実行される、この巨大で美しい驚異」であった、とバーネットは書いているが、「人間の意志と精神の力には限度がないことを証明しているように思われる、この偉大なもの」によって、二人は「これまでに味わったことがないほどに強烈な落ち着けない気分と切望」に満たされる。こうして、姉弟は博覧会の「ホワイト・シティ」という形を取って出現した「シティ・ビューティフル」を訪れたいという願いに捕らわれて、毎日せっせと農場でアルバイトに精を出し、シカゴへの往復の旅費に必要な十九ドル十セントが溜まると、何日分かの食料となる茹で卵をいれた鞆を片手に、叔母にも内緒のまま、「破滅の町」を捨てて、二人だけの旅に出発する。「わたしたちはビルグリムで、あの場所へのわたしたちの道は、わたしたちの天路歷程となるのよ」とメグは決意のほどを語っているが、この言葉は「天都」と、やがて彼らが見出すことになる「ホワイト・シティ」との結びつきを雄弁に物語っているのである。

六月のある日、数多くの見物人と一緒に、バーナムが「博覧会への巡礼者のメッカ」と呼ぶ「榮譽の中庭」にたどり着いた姉弟を出迎えたのは、「立派なアーチ」や「荘厳なペリスティール」であったし、「水はあくまでも紫水晶のようで、空はすばらしい歓喜の蒼穹であった」。「ホワイト・シティ」の景観に圧倒されてしまったメグとロビンは、「聖なる土地を歩いているのを感じているかのように、そっと歩いた」とバーネットは説明している。「まるで二人は世界の中心にいるかのようにだったが、その世界は二人が夢にみたこともないような、きらきら光り輝く美しい場所

あった」とすれば、メグのいう「シティ・ビューティフル」は「妖精の国」としか言いようがあるまい。ホリーの『博覧会のサマンサ』の場合でもそうであったが、この作品でも「ホワイト・シティ」の描写に何回となく「アラビアン・ナイト」のイメージが呼びこまれ、「これはお伽話だけれど、しかし、本当なんだよ」と語り合う二人が、「さまざまの驚異」を「若い喜びの情熱」をもって眺めた、と書かれている。「疲れはてた体」にもかかわらず、姉弟は「うっとりとした魂」を抱いていた、という説明は、二人の純粋な子供の強烈な体験を端的に物語っている。

二人はまた、会場でジョン・ホルトという人物に出会う。叔母の農場の近くに住む、イリノイ州で一番の大地主であるホルト氏は、「生まれてこのかた、勤勉で、野心的な、富を集める男」であったが、しばらく前に妻と子供を同時に失うという「黒い悲しみ」に見舞われ、人生に絶望し切っている。現在の彼にとって、「以前の仕事や計画の習慣や成功や増える一方の財産」は何の意味ももたず、「世界は彼にとって空虚であり、そこを彼は幽霊のように感じながら歩き回っていた」。その彼が一人淋しく「魔法の都」を訪れたのは、「それが晴れやかな喜びとして輝いているという理由でやって来た二人の子供たちとはちがって、それが彼の気晴らしになるかも知れないと思ったからである」と書かれている。だが、ホルト氏は会場で見掛けた明るく健康的なメグとロビンの姿に魅きつけられ、やがて一緒に見物をするようになる。二人の子供の「甘やかされていない爽やかさ」を眺めているうちに、「彼の顔から陰気な表情が消え、彼は別人のように見えた」とバーネットは説明している。

他方、懐の淋しい姉弟は、シカゴでの第一夜を、通り掛かった一軒の貧しい家で泊めてもらうが、翌朝、その家の病弱な息子ベンを連れて会場にやって来る。ベンの父親は大酒飲みで、生活費にも事欠く一家としては博覧会の「宮殿」を見学する余裕があるはずもなく、やっと念願が叶って、「シティ・ビューティフル」のほうに向けられたベンの「蒼白い、年寄りじみた顔は、赤らんで、若返っているほどであった」。憧れの「ホワイト・シティ」を目の当たりにした時、「美のすべての魅惑」が「ベンの飢えた魂」に押し寄せて来るだけでなく、あとで母親が語っているよ

うに、博覧会の空気に触れることによって、彼は「生まれ変わったように見える」のである。しかも、すっかり仲良くなったメグとロビンとベンの三人は、金持ちのホルト氏の好意で、素晴らしいホテルで一泊することになり、そこで「みんなエデンの眠りを眠り、パラダイスの夢を夢みた」という物語の展開は、シカゴの博覧会が時間と変化の支配する日常的な生活とは無縁の、エデン的な空間であることを示しているのである。

『二人の子供の天路歷程』は、メグとロビンがホルト氏の養子となって、幸福な生活を約束される場面で終わっている。「ジョン・ホルトがプリンスであるだけでなく、何かある魔法の変身の術によって、二人もまたプリンスになつてしまったように感じた」のであり、「これはお伽話だわ」というメグの感想通りになったのであるが、ここでもまた「ホワイト・シティ」が「奇蹟」を起こす力のある、「エデン」あるいは「パラダイス」的な世界として捉えられている点を見落としてはなるまい。ここではベンもホルト氏も、メグもロビンも、みんなが「生まれ変わったように見え」、「別人」となることができる。いや、ホルト氏がベンの父親に意見をして、その性根を叩き直すことまでやってのけるというエピソードまで用意されているのである。どうやら、『二人の子供の天路歷程』は、何もかもが円満に解決されることになる、無垢な子供を中心とした物語という意味で、バーネットの代表作『小公子』の延長線上にくる作品であると言ってよい。同時にまた、この筋立ては、一八八四年に英訳が出版されて、アメリカ大衆に歓迎されたアルプスの少女ハイジの物語を思い出させはしないか⁹⁹。病身なベンが奇蹟的に「生まれ変わる」という設定は、『ハイジ』のクララが車椅子なしで歩けるようになる場面と著しく似通っているのである。

勿論、『ハイジ』の場合、クララを含めた何人かの登場人物たちが「生まれ変わる」ことのできる世界は、アルプスの「自然」の世界であったが、バーネットの作品では、「ホワイト・シティ」という「都市」で「魔法のような変身の術」が可能となり、「奇蹟」がつきつきと起こっている。「ホワイト・シティ」は近代的な技術によって現出した世界であったから、そこで「エデンの眠り」や「パラダイスの夢」が約束されたということは、バーネットがアルプ

スの「自然」とまったく同じ意味を、シカゴの「ホワイト・シティ」のなかに読み取っていたことを物語っていると考えねばなるまい。ある論者はバーネットが「天都の崇高な精神性と世界コロンブス博覧会の現世的なはかなさ」とを結び付けていた⁽⁶⁾と語っているが、結局のところ、『二人の子供の天路歷程』の作者は、「ホワイト・シティ」という「巨大で美しい驚異」のなかに、もう一つの「秘密の花園」を発見していたのである。バーネットもまた、ホリーやバーナムと同じように、シカゴに出現した地上の「新しいエルサレム」を訪れる「博覧会への巡礼者」を描きあげることによって、同じシカゴで論文「アメリカ史におけるフロンティアの意義」⁽⁷⁾を発表した歴史家フレデリック・ジャクソン・ターナーのそれとは異なった、希望にあふれるアメリカのイメージを模索していたのかもしれない。これらの女性作家の作品が人気を博したのは、世紀末アメリカの大衆が「ホワイト・シティ」によって象徴される都市的空間のなかに、新しいフロンティアの可能性を読み取ることを願望していたからではないだろうか。

注

- (1) Marietta Holley, *Samantha at the World's Fair* (Funk & Wagnalls, 1893).
- (2) Jane A. Curry, "Marietta Holley," *Dictionary of Literary Biography* 11 (Gale Research, 1982), 206; James D. Hart, *The Oxford Companion to American Literature*. Fifth Ed. (Oxford UP, 1983), 338.
- (3) Curry, 207.
- (4) 女性雑誌『リトル・ジェーン』(Little Jane)の1893年10月号に「The Fair Women」(The Fair Women)と題してJ. C. Levenson et al., eds., *The Letters of Henry Adams*. Vol. IV (Harvard UP, 1988), 259.
- (5) F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby* (Penguin Books, 1984), 26, 171, 172. 中略
- (6) Clara Louise Burnham, *Sweet Cloner: A Romance of the White City* (Houghton Mifflin, 1894).
- (7) Stanley J. Kunitz and Howard Haycraft, eds., *Twentieth Century Authors: A Biographical Dictionary of Modern Literature* (H.W. Wilson, 1942), 226.

- (9) Cf. David F. Burg, *Chicago's White City of 1883* (UP of Kentucky, 1976), 293-94; Carl S. Smith, *Chicago and the American Literary Imagination, 1880-1920* (U of Chicago P, 1984), 145-46.
- (10) Frances Hodgson Burnett, *Two Little Pilgrims' Progress* (Scribner's, 1895).
- (11) Ann Thwaite, *Waiting for the Party: The Life of Frances Hodgson Burnett, 1849-1924* (Scribner's, 1974), 150; Burg, 290.
- (12) 拙著『金メッキ時代・再訪』(開文社、一九八八年)、二一〇—一四頁。
- (13) Burg, 291.
- (14) Frederick Jackson Turner, "The Significance of the Frontier in American History," *Frontier and Section: Selected Essays of Frederick Jackson Turner* (Prentice-Hall, 1961), 37-62.

〔バーネットの項は『英語青年』(一九八八年五月号)掲載の小論「ホワイト・シティ」とアメリカ作家」と一部重複していることをお断わりしておく。なお、「アメリカ作家とシカゴ博覧会——ハウエルズとドライサーの場合」(『英米文化研究』一〇号)、「シカゴの白く塗った墓——『ホワイト・シティ』のもう一つの見方」(『英米文学』三六巻一号)、「ハリエット・モンローとシカゴ博覧会」(『英語青年』一九九二年四月号)を参照されたい。〕